ルールブレイカー

我が家の鼠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ルールブレイカー

【Ｎコード】
Ｎ０８５９Ｓ

【作者名】
我が家の鼠

【あらすじ】
何も憶えてないのになんで俺はここに居るのか。そんなのは分らない。
ただ憶えているのは俺が一人だったってことぐらいだ。でも今は仲間がいる。今でも憶えている。いろいろなことがあったが、
あの日に俺は、ナインは生まれたんだと。
俺にはまだ分らないことが多すぎる。でも、このままでもいいのかもしれないな。

なんかプロローグが始まった？（前書き）

なんか、似てない？ておもったら駄目だよ。

なんかプロローグが始まった？

『ルールブレイカーは確か、何かを捨てて力を得る者のこと、今日ボスに習った。他には心を捨てられなかったルールブレイカーは怪物になってしまうこと、俺の名前がナインになったこと』

「日記はこれぐらいでいいか。」

今日名前が決まった俺は日記を閉じる、俺が記憶を失ってから3日。俺はこの組織に入ってからいろいろと手に入れ始めた。俺には魔力無効化能力と物理無効化能力などがあるらしい、しらべれば他にも分るようだが俺にはなぜか、知りたいとは思わなかった。俺は明日からフェンとかけらの回収に行くらしい。

俺らが救われるには魔精霊アトンの闇と光の力が必要らしい。俺にはさっぱりだが従っていた方がいい気がする。

～朝～

「よし、行くぞ。」

「分った。」

俺は頷く。

「まったく。もうちょっと喋らないときまずいな。」

きまずい？俺の知らない単語が出てきた。

「きまずい。ってなんだ。」

「ん？いづらいとかそんな感じだ。」

やっぱり分らん。

～なんとか目的地～

「やっと着いたな。」

「そうだな。」

疲れはしなかったが長かった気がする。

「ほら、おでましだぞ。同士だ。」

フェンが指す方向には怪物がいた。

「あれが、同士なのか？」

「そうだ、心を捨てれなかった俺らだ。」
怪物の姿をよく見る。トカゲっぽい怪物はよだれを垂らしながら
グワアアアアアアアアアア！！
と叫んでいる。
「強いのか？」
「いんや、あいつは雑魚だ。」
「雑魚？」
本日2個目の知らない単語。
「ああ、弱いってことだ。」
「じゃあ安心だな。」
「そゆこと。」
フェンはかなり離れているトカゲに一歩で間合いを詰めた。
そしてトカゲの腹に触れた。と思ったら時、トカゲが凍った。
「ほらな。」
「・・・・・。」
よく見てなかった。
「もっとなんか言ってくれよな。すごかったな、とか。」
「すごかったな。」
オウム返しに言う。
「よし、あれを回収するぞ。」
「あれ？」
俺はフェンが指した方向を見ると黒い水晶のようなものと白い水晶のようなものがあった。
「あれは？」
「ん？魔精霊の力だそうだ。ボスが言ってただろ？同士は我々と同じものを求めているとかなんとか、だからあいつらは俺らが欲しいかけらを集めてるわけで、んで、あいつらは怪物で、俺らはかけらを横取りするってわけだ。」
「そうか。」
日記に書かないとな。

「よし、今日の回収ノルマは達成したな。ついてこい。」
・・・・・。
「帰らないのか？」
「ん？まあちょっと寄り道しても怒られないだろ。」
フェンが言うならそうなのだろう。
「分った。」
～ついていくと～
俺は魚の形の焼き菓子を渡された。
「これは？」
「鯛焼きだ。」
鯛焼き・・・・。
「鯛には見えないぞ。」
「まあ、そりゃそうだがうまいから食え。」
「分った。」
俺は鯛を一口かじる。
「中に入ってるのは何だ？」
「あんこだ、他にもいろいろあるんだけど、まあそれが定番だ。」
あんこ・・・・。
「あまいな。」
「そりゃそうだ。のどが渇いたか。」
・・・・・。
「ああ。」
のどが渇くとは何かわからないがのどに違和感を感じる。
「ほら。」
「これは？」
「お茶だ。」
・・・・。
「お茶を入れてる容器はなんだ？」
「ペットボトルだけど？」
ペットボトル。

俺はペットボトル専用と書かれた赤色の箱に空になったペットボトルを入れる。
「よし、じゃあ帰るか。」
「分った。」
よく分からないが帰るらしい。俺とフェンは立ち上がると本部へと歩き出した。

なんかプロローグが始まった？（後書き）

終わったね、しばらくは書きたくない。が、書く。のかな？俺には分からない。
ナインってルールブレイカーってレイナント？いいえまったく関係ない・・・と思う
ありがとグレートうさぎがあんだから鼠でなにか作ってよＡＣ！！

まだプロローグ（前書き）

まだですまだです。ね話に着いてけないぬ。

まだプロローグ

「ほら、ヴェイル。これで仕事終わりだろ？」
フェンが青髪の男にかけらを渡す。
「・・・・・・。」
「確かに受け取った。今日は終わりでいいぞ。」
・・・・・・・。
「よし、帰るか。」
「帰るって何処に帰るんだ？」
「ああ、俺は家に帰るけど、お前は本部に部屋があるだろ？」
「そうだった。明日俺は何をするんだ？」
フェンは「なんだっけなあ」とたっぷりと考えた後
「お前はたしかボスと堕天使がいる世界を調べるそうだけど。」
俺はフェンと別れた後昨日と同じく部屋に戻って日記を書き始めた。
『怪物は俺らが捜してるかけらを持っているのでたおしてかけらをあつめる。それがかけら熱めの仕事の内容で・・・・調査は、まだ分らない。あと今日鯛焼きを食べた。異様に甘かった。』
～朝～
「ここがアクダリアの城下町、そしてあそこにあるのがギルドだ。」
・・・俺は今ボスと一緒にアクダリアの国の城下町に来ている。
「調査って何をするんだ。」
「まだ言ってなかったか、我々はここに来るの初めてなのでな、この場所についていろいろと調べてここで戦うことになったら土地を有効に使えるようにするとかだな。」
・・・分らん。
「ギルドって何だ？」
俺はギルドと呼ばれている建物を見る。ここは大通りで今いる薬屋の反対側がギルドらしい。
「怪物や盗賊などの討伐の受付をして、討伐ができたら金を受け取

るところだ。」
「俺らの会議室みたいなところか。」
あそこでは今日の仕事となどを決めるところだった。
「まあ金はもらえんがな。似たようなものだろう。今受付の女と話しているのがマサヤ、何か飲み物を飲んでいる貴族の女はこの国の姫のウィク、そしてウィクと話しているのがアオイだ。」
あれがみんなが話している堕天使か。
「ん？こっちにウィクが気づいたようだ。」
確かにウィクという女はこっちを見てる。別に後ろの薬屋の品を見てるんじゃなくてボスの方を見ているようだ。
ボスは口を薄く開いて黄色い歯をのぞかせ二ヤリと笑った。
その時ちょうど人の波が来た。前が見えなくなる。
「来い。」
俺はボスについていき人気の少ない路地に入った。
「マサヤという堕天使を見たか？」
俺は頷く。
「そうか、相手をしてやれ。」
？
「相手をするって？」
「戦うということだ。」
戦う。
「あいつはかけらを持ってないと思うけど。戦うのか。」
「かけらの回収がすべてではない。」
なるほど。でもなぜ戦うんだ。
「俺が負けたらどうするんだ。」
「そしたら俺が助太刀する。」
なら安心なのか・・・。

まだプロローグ（後書き）

なんかナインってキャラが分からん。レイナントとこの話は繋がってます。
まだマサヤ死んでないです。この話は戦争後の話ですね。
最近ウィイ！！の呪怨をやってるですが怖いですね。

プロローグ？（前書き）

俺はなんなんだろうな。分りません

プロローグ？

カーン。カーン。カーン。カーン。カーン。カーン。
音が街に響く。
この音は・・・。
「この音ってなんだ？」
俺はボスに訊く。
「おそらく、時を告げる鐘の音だろう。」
なるほど、部屋に置いてある目覚まし時計のようなものか。
「そろそろ大通りに戻るぞ。」
俺は頷いてボスの後についていく。
大通りに出ると、赤い夕陽が沈んでいくのが見えてた
なんか、胸から何か抜けてくような。この感覚はなんなんだ。
人は昼間に比べて少なくなっている。
「空の色が、変わってるな。」
「そうだな。本部の世界は常に夜だからな。」
夜？
「夜の空はいつも暗いのか？」
「そうだ。」
日記に書くことが増えたな。
「俺はどこの世界の人だったんだ？」
「そこまでは知らない。」
ボスはポケットから謎の器具を取り出す。
「それは？」
「堕天使レーダーだ。」
・・・・。ピコンピコンと電子音をならしながら画面が点滅する。
すると急にフゥゥゥゥゥンと鳴って画面が暗くなった
。どうしたんだ。何が起きたんだ。
「何が起きたんだ？この機械は何なんだ？」

「今電池切れになった。この機械は近くの堕天使を探知する機械だ。」
日記に書かないとな。
「電池というのは？」
「・・・・・・。」
急に黙るボス。
「どうしたんだ？」
「来たようだ。」
何が・・・・あたりを見回すと二人組の女がこっちに向かってくるのが見える。
逆光で赤く染まっていた人影が近づいてくるにつれて誰か分かってくる。
あれは・・・・・アオイとウィクってやつだな。確かアオイは堕天使だったはずだ。
「あいつらがどうかしたの？」
とアオイがウィクに訊く。ウィクが口を開いたときに
「堕天使。お前はどう思う。」
いきなりボスが話しかけた。
「何がですか・・・。」
・・・。警戒してるのが見ればわかる。
「警戒しなくてもいい。これをどう思う？」
ボスは苦笑しながらあっちに向かってかけらを投げてた。
それは闇のかけらだった。
「これがどうかしたんですか？」
アオイが訊くと。
「いや、お前はどう感じるか教えてもらいたいのだが。」
ボスは再び問いかける。
「綺麗じゃないですか？」
綺麗・・・・ってなんだ。
「ふっ、そうか・・・・。」

俺は口を挟む。
「何が面白いんだ？」
苦笑しているボスに向かって訊く。
「ん？別に面白くはない。我々には面白いと感じる物がない。」
そうだよな。心がないしな。
「そうだよな。だけど・・・・なんでもない。」
俺はあの時・・・・。
「そうか。」
ボスは呟く。
アオイという堕天使がこっちを見ている
あいつは何なんだ。
「あなたたちも、堕天使なんですか？」
ボスは首を振った。
「じゃあ。なんですか？」
「何でもいいと思うだろ。」
いつの間にかボスは葵の目の前にいた動いた所を見てなかった。
「これを返してもらおうか。」
ボスはアオイの手にのってるかけらをポケットに突っ込んだ。
「あとはどうすればいいか分かってるな？」
ボスが訊いてくる。
俺がコクリと頷くとボスはその場からゆっくりと離れて行く。
俺は確か・・・・・雅也と相手をするんだよな。
相手っていうのは確か・・・・戦うってことだったな。

プロローグ？（後書き）

なんか変な勘違いをしているナインだがやっと本編にはいれ～る！！なんか嬉しいなあ。
これから～←かな～→。
どうしても、ナインと雅也たちが同じ世界にいるときデジャブってしまう。

マサヤ（前書き）

なんなんだこいつ。

マサヤ

・・・・・。いつまで待てばいいんだ。あたりは本部の世界と同じくらい暗くなっている。これが夜なのか
ギルドの中が騒がしくなる。
・・・・・・。
中から一人の男が出てきた。堕天使だな。
「おい、マサヤ。」
マサヤは振り返った。
「だれ君？」
・・・・・。そう聞かれるとは、ボスはなるべく人との接触を避けるようにとは言ってたけど。名前は教えても大丈夫か。ほんとの名前さえもわからない。
もしかしたら、マサヤの記憶にナインて言う名前の俺がいるかもしれないな。
「俺はナインだ。」
「ないん？漢字でどう書く。」
漢字・・・。
「漢字は使わずカタカナでナインだ。」
「ふ～ん。」
話がずれてる気がするな。
「それで俺は、お前と戦わないといけない。」
「なんで？」
・・・・。それは知らないな。
「俺には分からない。」
「ほ～。じゃ、始めようかな？」
「ああ。」
マサヤが剣を抜くのが見える。あれは妖剣だな。俺には魔法が効かないからたいした凶器じゃない。

剣も俺には物理無効化があるから、おもちゃみたいなものだな。
「それじゃ、倒せないぞ。」
マサヤは顔をしかめて。
「お前もすでじゃ倒せないぞ。」
確かに。
「俺には関係ない。」
い。と言い終わらないうちに喉に向かって剣が突かれてきた。俺は体を空してかわして妖剣をつかむ。
つかんだ手からは血も何も出てこない。
力を入れると妖剣にひびが入る。
「お前、なんなんだ。」
マサヤは驚いているようだ。
「え？俺には分からない。」
「またそれか。物理は効かないんだな。」
俺はうなずく。
「じゃ、これは。」
妖剣が赤く光る。
？？？？？
次の瞬間体は炎に包まれた。
熱い。なんて感じない。魔力無効化は魔力自体を触れて消すものじゃない。自分に向かってる魔力の威力を打ち消すので。魔法は消えない。
とヴェイルが言っていた。
「な、魔力も効かないのか。」
俺はうなずく。
マサヤはにやりと笑った。
「もう攻撃する手段はないだろ？」
「いいや。」
マサヤは妖剣を地面に突き刺した。
武器を捨てて殴る気か？

徐々に地面にひび割れが出来てくる。
「なんだ？」
「教えるわけないだろ。」
・・・・。俺ただひび割れを見ていた。
ひび割れはどんどんこっちに向かってくる。
俺の足元に来た。とたんに地面から炎が噴き出してくる。
俺は後ろに下がりとりあえず避ける。
ギルドの人たちが炎に気付かないはずもなく。
ギルドは大騒ぎだった。
「俺は緑に銀貨2枚だ！！。」
とか聞こえる。なんのことだ。
俺は目の前で起きてることに気付いた。
炎が動いてる？
炎は意志があるかのようにくねくねと動いていた。
ひび割れはいろんなところに出来てきて、剣から少し離れたところに来たら炎が噴き出してきた。
・・・・なにをするつもりだ？
魔法は効かにのに。
そのときマサヤが喋った。
「魔力無効化ってのはさ、魔法で出来た物をぶっ壊す
あの右手と違って、威力のみを消す。つまり。」
ニヤリと笑った。何が面白いんだ？
「こうしたら、逃げれないってことだろう？」
炎と炎がつながった。外から見たら巨大な火柱。
だが中には空間がある。空も中から見えるし酸欠にはならない。でも、逃げれないというわけじゃない。
「・・・。炎には実体がない。だから逃げれると思うが。」
「やってみろ。」
俺は頷くと炎に触れた。とたんに炎の壁から鞭のような炎が何本も俺に向かって伸びてきて俺を拘束した。

「な。」
力を入れれば入れるほどきつく締まる。
「いやあ、ひっかかってくれるってのはうれしいね。
戦争でもウクダリア王国を力で乗っ取てた堕天使もさ
この技にひかかってくれて、俺はそいつにとどめを刺してきた瞬間、
そいつが大剣の妖剣デュランダルで俺の肩から足までスパッと切っ
てきてな。おりゃ相打ちになったと思ってたんだけど。なんか神父
のじいさんの知り合いが俺を助けてくれたみたいだったし。」
マサヤは妖剣を抜く。
「まあ、あれは俺が油断して3本のそれで縛らなかったのがいけね
えな、片手フリーだったし。」
今のおれは両手も足も縛られてて。膝を地面につけて座ってる。こ
れじゃ抵抗もできないな。助太刀にくるはずのボスもこの壁じゃ俺
の様子が分からない。
「でも、今回はちゃんとできたな。これぞ、戦争前に茜さんと謎の
修業をして手に入れた技・・・。」
マサヤは俺に一歩で間合いを詰める。
この距離ならあの剣は俺の体をさすことが出来るだろう。
体に激痛が走る。
あ、腹刺された。
「これが『地獄(インフェルノ)』だ。」
その言葉は俺に届いていなかった。
〜?〜
なんだ、この感覚。何も分らない。何も・・・・
〜外〜
マサヤは俺の腹（剣が刺さってないところ）を乱暴に蹴って剣を引
き抜いた。
そして止めをさすべく剣で首を切ろうとしたとき。炎の壁がかき消
された。
「なんだ?」

炎の壁を消したのは灰髪の男。フェンだった。
（めんどくせぇ。どうせなら勝ってくれりゃ、俺の仕事も楽だったのにな）
フェンは地面でのびているナインを脇で抱えた。
そしてその場から去ろうとして歩き出す。一歩。
「おい、そいつは俺と戦ってるんだ。邪魔するなよ。」
「アハハハハハ。すっかり踊らされちまって。お前ら。もうちょっとは自分たちのことを考えてみな。ほら、こいつやるからよ。」
フェンは握り拳サイズの氷の塊をマサヤに向かって投げた。
きれいな放物線を描いてマサヤはキャッチ・・・せずに剣ではたき落そうとした。
氷の塊に剣が触れた瞬間。
おおきな氷の塊になってマサヤを飲み込んだ。
（これで仕事終了だな。だいたいマサヤの力量は分かったし）
前を歩きだすが2歩程度歩いた時。うしろが熱い。
「まだだぜ？」
疑問形で言葉をかけてきたのはマサヤ。どうやら妖剣の力で氷を溶かしたらしい。
水たまりも残ってない。全部蒸発しているようだ。
（めんどうだな。まあこいつがあるし）
フェンはポケットからなにかウニョウニョしたものを取り出す。それを地面に置き。
「こいつでも相手にしてな。」
フェンは本部に戻るべく歩き出した。
～邪魔されずに本部～
「やはり負けたか。」
ボスがフェンに向かって話す。
フェンはめんどくさそうに答えた。
「負けたよ。あいつら、ブレイクドールに驚いてたな。」
話題を変えられた。

「ふ、あれは最近できた、ヴェイルが発明したものでな。だから探求者さえも足止めできた。が、探求者はどうやって倒すのか分かったらしい。」
「へ～。」
フェンは立ち上がる。
「帰るのか？」
「言わなくてもわかるだろ？」
フェンは部屋を出ていきボスだけが一人残された。
～次の日～
俺は目を覚ました。いつもと変わらない目覚ましの音で。俺は気絶した。で、起きた。今はあれから何日たったんだ？
その時部屋のドアノブが回り中に誰か入ってきた。
「よ、3日ぶりだな。」
「俺は3日寝てたのか？」
フェンはうなずき
「そ、ほら鯛焼きだ。」
俺は鯛焼きを受け取る。・・・・・フェンは俺が寝ている間に見舞いに来ていたのか？そして毎回鯛焼きを二つ持ってきていたのか？
効かなくても確かめる方法は
・・・・・・。俺は鯛焼きを食べ終わるとゴミ箱を引き寄せ捨てた。そのときゴミをちらりとみたら。鯛焼き屋の名前が入った紙袋は二つあった。
「俺が眠ってる間ずっと見舞いに来てたのか？」
フェンは顔をしかめると
「ああ。まあな。ボスに命令されたからな。」
・・・・・。ボスは仕事以外のことは頼まないと思うがフェンが言ってるならそうなんだろう。
「・・・変な街だな。人が一人もいない。」
俺は気になっていたことを言う。窓から見える本部がある町はたくさんのビルが立ち並んでいる。が人が一人もいなし虫すらもいない。

「・・・・・。まあな。この世界はボスが造った世界だ。」
「そんなことができるのか？」
「まあな。神も見抜けなかった力だ。」
・・・・・・。
「なあフェン。あの月を見てるとなんかおかしくなるんだ。」
「狼男にでもなったのか？」
おおかみおとこ？
俺が黙っていると。
「冗談だ。」
と言われた。
「あの月を見てると、胸から何か抜け落ちるような。そんな感じになるんだ。」
「ん？なんだそりゃ。」
「俺たちには心がないんだろ？」
「ああ。」
「だったら、これは体がまだ痛むのか？でも俺はマサヤのいる世界の夕陽を見たときにも同じ感覚になったんだ。」
フェンは考え込んで。
「もしかしたら、過去の記憶。まだ心を捨てなかった時の記憶が関係してるんじゃないのか？」
・・・・・・。
「俺には過去の記憶がない。だから名前も分からない。」
「そうだな、頭で憶えてなくても、なんとなく。憶えてるんじゃないのか？月や夕日を綺麗だと思った時の記憶を。」
・・・・・。
「意外とまともなことを言うな。酔ってるのか？」
フェンは顔をしかめると。
「ふざけんな。俺は酒を飲んでないし。いつも真面目だ。それにどこで覚えたんだ？そんな会話の仕方。人じゃないとできない。『冗談』ってやつだ。俺らには冗談のどこがおもしろいのか分からねえ。

昔は分かったけどな。」
・・・・・。
「でもフェンも使ってたよな『冗談』。」
「ん？まあな。あれはまだ人間だったころ使ったことがある冗談だ。」
よく分からない。

マサヤ（後書き）

ない。

キア（前書き）

今日はかけらの回収か。

キア

今日はキアとかけら回収に行くように言われた。
キアというのはこの組織唯一の女で、ボスと同じ黒い髪をしてる。
空を飛んでるあれは・・・
「いたぞ。」
俺はキアに報告。
「ん？ちょっと眠いから先戦ってて。」
・・・・。
「分かった。」
「よろしく～。」
・・・・。
俺は目標を見る。
虫。だな。ムカデとトンボを掛け合わせたような生き物。リーンと音を鳴らしながら空を飛んでいる。
膝を少し曲げて、足に力を入れる。足が地面にめり込む。そのまま地面を思いっきり蹴って飛ぶ。
あっという間にムカデトンボの真上に来た。
手がかじかむ。俺は感覚がなくなっている右手を握り締めると重力に従い降下する。
ムカデトンボの堅い骨格に触れた。わずかだがムカデトンボが逆くの字に曲がり落ち始めた。
「うわあああああああああああああああああ。」
手が焼けるように痛む。なんだこれ。
目の前がまぶしい。
眩しさの正体は。俺のペンダントだった。
淡い緑にペンダントが光る。これは。
ズン！！
と音を立ててムカデトンボが地面に落ちた。

腕がムカデトンボの体に沈む。汚い体液で腕がベタベタになる。
「・・・・・。」
俺は嗅覚を捨てたから何も分からないがおそらく臭いのだろう。
苦しそうにムカデトンボが抵抗する。
羽は2枚ずつ重なっているようで、ムカデはそれをこすり合わせ始める。
何をするつもりだ。この前のマサヤのこともあるし。敵が何か分からないことやる時にピンチになってしまう。止めた方がよさそうだ。
俺はムカデトンボの背中から右腕を引き抜く。右腕をかばいながらムカデトンボの頭に向かって走る
以外とでかいな。トンボの頭をしている頭を右手で殴る。頭はきれいな放物線を描き飛んでいく。
これで終わりか。
激しい痛み。
俺の体が宙に飛ぶ。
俺は地面に叩きつけられた。鈍い音がして息をすると体が痛むからおそらく折ったな。
体を転がして立ち上がる。
・・・・。頭はないのにどうやって動いてる。
すると頭がついていた所から頭が生えてきた。
頭じゃ駄目なのか。しばらく眺めていると。また羽をこすり合わせはじめる。
「風だよ！！避けな！！。」
キアが叫ぶ。
・・・なるほど。羽の周囲からキィィィィンと高い音が聞こえる。
目の前の地面が裂ける。
激しい痛み。体が切られた。避ければよかった。
「馬鹿！！。」
キアはこいつが負けたら自分が倒さなきゃいけないからアドバイスしているだけなのだがナインは気付いてない。

さっきよりもペンダントが強く光る。
これは・・・・痛みに反応してるのか。
『体、心、なんでもいい。俺の痛みが力になる』
俺の喉から出てきた言葉。記憶にない言葉だった。
でも確かに俺の喉から出てきた。
いまはこいつを先に倒す。
地面を強く蹴る。俺の体が跳ねて高度を上げていく。
雲をなんどか通り抜ける。
・・・・寒い。
雲を抜けると。白い太陽があった。
俺は下を見る。視覚を捨てた俺は超感覚を手に入れ。超感覚はひとの五感すべてを補うことが出来る。
ほんとは見えないはずのムカデトンボもはっきりと見える。
俺はそのまま降下する。
どんどんムカデトンボが大きくなってくるように見える。
俺は片脚を真下に伸ばして降下する。
ムカデトンボの骨格に足が触れた。
今度は脚のみがめり込むのではなく俺の体ごとムカデトンボの体に突っ込んだ。
「ギュネイエエエエエエエエエエエエエエエ」

ムカデトンボが叫び。破裂した。

「おつかれ。」
・・・・。
「ずっと休んでたよな。」
「うん。まあ眠れたし。ありがと。」
・・・・。俺はかけらを拾う。
「仕事、終わりだな。」
「ん？そだね。」

「俺は帰る前に寄るところがある。先に帰ってくれ。」
気になることがあるしな。
「ん？じゃ、かけら渡しなよ。報告しとくからさ。」
頷いてかけらを手渡した。
「あと、帰る前に体。洗ってきなさい。」
・・・・。やっぱる臭いんだな。
～中央世界（セントラルワールド）～
ここの銭湯ってところで体を洗って今俺はコインランドリーにいる。
何故こんなとこにいるのかは分からないが、鯛焼きを買いにこの世界に来たらフェンがいて。
顔をしかめて。
「ついてこい。」
と言って歩き出してついてったらこうなった。
・・・・。俺は鯛焼きをかじる。
外では。5人の人間が遊んでいた。そのうちの一人は何故か色が透けていて後ろの建物が見えていた。
「お～い！！そっちに行ったぞ！！。」
「逃がすなよ！！和希（かずき）！！。」
変な鳥を追いかけているのが見える。
「なあ、フェン。」
「ん？」
・・・。あんこで口が汚れているフェンの顔を見る。
「あいつら何を騒いでるんだ？」
「ん？たぶん・・・・・遊んでるだけだ。」
「人間は、遊ぶ時に騒ぐのか？意味が分からない。」
「まあな。俺らにはもう理解できねえよ。」
・・・・・。
「フェンの記憶には、俺はいたか？」
「・・・・・。分からねえ。会ってたとしても忘れたな。」
「どおいうことだ？人間だった時の記憶があるんじゃないのか？」

・・・（ある）。とフェンは心の中で呟いたのだがナインには聞こえてるはずもない。
「でも、お前に似たやつになら会ってる。」
・・・・。似てるじゃ駄目なんだよな。
「やった！！捕まえたぞ！！これが人面鳥だ！！。」
どんな鳥だ。
「うわ！きもちわる！。」
女が人面鳥を持ち上げている。他の４人はその鳥を見ながら騒いでいる。
・・・・・。
「お、お前の服乾いたな。」
フェンがこっちに服をよこした。
「ありがとな。」
俺は立ち上がった。
～破壊者の世界～
「ふむ。ではお前はたまたま。フェンに会って服が汚れていたから。コインランドリーで洗ったのか・・・別に洗濯機ぐらい本部にはちゃんと置いてある。」
俺は頷く。今は遅れてきた理由を話していたところだった。
「まあいい。今日は休んでおけ。明日はヴェイルといろんな所に行ってもらう。」
・・・・そんな所なんだ。

キア（後書き）

あ～この世の終わりだ。
なんて来年の冬頃は思っている頃だろう。
単位が足りない！
とか騒いでるんだろう。
そんなことですね。まあルールブレイカーはこうやってずっとかけら集め。調査。を繰り返す話だね

ヴェイル（前書き）

あれ？君の後ろにいるのは・・・・・・・なんだ、俺か。

ヴェイル

「ナイン、今日は中央世界付近の世界でのかけら集めだ。」
・・・・・。
「中央世界？」
「聞いてなかったのか？では歩きながら話そう。」
廊下をあるく音とヴェイルの声が混じる。
「ではまず。世界の始まりからだな。
神は天界の次に地上という世界を造った。地上の者は魔力を手に入れ。魔力に才能もなく誰にでも使えたものだった。５人の賢者が自分たちはどうやって造られたのか知りたいと思い。そこで研究に研究を重ねてひとつの魔法を造り出した。地上と天界を繋げる魔法。それを使った時。地上の決まりが捻じ曲げられた。地上は混沌に呑み込まれた。神は地上と繋がった道を断ち切り地上を見捨てて、あたらしく地上を造った。見捨てられた地上は魔界と呼ばれるようになりそこに住む者は人ではなくなり悪魔となった。
地上を新しく造ったとき天界で問題が起きた。
一部の天使が神に逆らったのだ。逆らった天使は。天界から堕天され堕天使になった。
地上が二度と天界と繋がらぬように人から魔力を奪い取った。しかし、魔界の影響を受けて魔力が覚醒するものが現れるが。それほど強力でもないので神は放置した。
地上うに精霊を置き人の知能が高くなりすぎるのを防がせていたが、ある時問題が起きた。
ベヒモスから生まれた精霊が。魔界に墜ち。混沌を吸い込み魔精霊になったのだ。
魔精霊は強力で、すべての精霊の力すらも寄せ付けない闇と。天使や精霊がどんな守りの術をつかっても防ぐことのできない光の力を持っていた。地上も天界も魔界もピンチになったので、人と悪魔と

神は力を合わせ魔精霊の抹消、封印の術を探した。そして悪魔は精霊を剣に閉じ込めて妖剣を造ることを発明し。人はある物に『砂漠』と呼ばれる異世界造り出した。神は自分にかけていた力の鍵を外し。魔精霊を抹消させようとした。
そして魔精霊との戦いの日。神の一撃で魔精霊が闇と光に真二つに分かれた。悪魔は光を妖剣に入れ
人は闇を砂漠に入れた。神が魔精霊を割ったとき。地上の世界はバラバラに裂けた。そして今に至る。
中央世界は今の地上の本来の姿。つまり科学のみの世界だ。中央世界いがいの世界は、わずかだが魔力と関わりがある。何か質問はあるか？」
俺はヴェイルを見上げて（ヴェイルは俺より背が高い）。
「ルールブレイカーの始まりはなんなんだ？」
「それはまだ研究途中のことだが、おそらく禁忌を破ったからであると考えられる。」
「禁忌って？」
俺には分らないことが多すぎる。
「禁忌は神が造った。破ってはいけない決まりだな。それを破った時。神すらも予想できなかったことが起きた。我々（ルールブレイカー）の誕生だ。」
そうやって俺らは生まれたのか。俺が破った禁忌ってなんなんだ？
「さて、そろそろ行くとするか。」
～どこかの世界～
ここはこの前こいんらんどりーって場所に服を洗いに来た世界だ。
「ここの何処に行くんだ？」
「おそあくあの館だな。闇の力を多く感じる。」
寂れている古い館。誰もいなさそうだし。怪物の動く音も聞こえない。
「本当にここか？」
「ああ。間違いないな。今回倒すのはルールブレイカーではなく人

の思い、すなわち幽霊だな。」
ゆうれい。優麗。幽霊。
幽霊だな。
「よし、さっさと終わらせて帰ろう。」
「そんな言葉何処で習った。」
習う？
「分らない。」
「そうか。」
ヴェイルは館のドアを静かに開けた。
ギィィィィ・・・・・
静かだ。
ヴェイルは何か分るらしくて
「ついさっきここに人が入ったな。」
「なぜ分るんだ？」
ヴェイルは床を指さして
「埃がない。こんなに古い館だし、人が住んでるとは思えない。なのに床に埃がないからだ。」
「よく分かるな。俺は気づかなかった。」
「周りをよく見る。お前には視力はないが超感覚はつかえるのだろう？」
俺は頷いた。

ヴェイル（後書き）

さて、世界の始まりを書いてみました。それに、今回も何かと似た文章が。
でもしばらくはマサヤたちと関わらないかな？
で。
「あれ？マサヤも禁忌破ったよね？」
・・・・・・。そうだ。忘れてた。とりあえず見なかったことに（実は重要だったりしない）

幽霊退治（前書き）

俺には分らない。過去の記憶もないのに、これからどうすればいいんだ。
もし、俺が人間だったら、何か分ったのかな。
ｂｙ日記

幽霊退治

「いや～久しぶり。和希君。」
廊下の奥の部屋から聞こえてくる。その部屋だけ何故か明るい。
「久しぶり?。誰さん。でも一昨日あったばかりじゃ。」
「それもそうかな～。」
俺はヴェイルを見上げた。
「誰だと思う。」
「さあな。もうすこし。話を聞こう。利用できるようなら利用する。」
俺は頷き話し声に集中する。
「で、誰さんは何をしてるんですか?」
「えっとね。ここに強い幽霊の気配を感じたから。ここの神様としてはそういう厄介な幽霊をほうっておけないしね。幽霊退治。幽霊退治。」
女っぽい声が聞こえるが男っぽくもある。どっちかわからない。
「幽霊って。」
ヴェイルは頷き。
「我々が探している。幽霊だろう。」
「じゃあどうする。」
「まかせろ。」
ヴェイルは言うと明るいドアに近づき、ノックもせずにドアを開けた。
「「誰?」」たぶん和希と男か女か分からない奴。
「我々は、この館の幽霊を倒しに来たのですが。」
ヴェイルの声が聞こえる。うまくいきそうだ。
「はぁ。」「手伝ってくれるのかい?」
「もちろんです。ナイン。」
呼ばれた俺は部屋に入る。

そこには男一人女一人。どっちか分からないの一人がいた。
「誰？」分からない奴が訊いてくる。
「俺はナインだ。」
「ふ～ん。人間？」
どっちか分からないのが訊いてくる。
人間。ではないから首を振る。
「そっか、そっちの人も人じゃないのか。」
ヴェイルは頷いた。
「私はヴェイルと言います。名前を聞いてもいいですかな？」
「私は、五十里真静（ごじゅうりましず）っていいます。」
女が答える。
「俺は杉下和希（すぎしたかずき）だ、よろしくな。」
「よろしく。」
・・・・。どっちか分からないのは名乗らないな。
「お前は？」
黙ったままだ。
「ああ、この人？は誰さんだよ。」
「だれ？変な名前だな。」
「まあね。自覚はある。」
あるのか。
「幽霊は何処にいるんだ？」
誰は首を振りながら
「この館にいるんだけどな・・・・入り方が分かんないんだよね。」
「隠し部屋のようなものなのか？」
ヴェイルが訊く。
「うん。」
「なら、我々が探しましょう。」
と言うと俺の腕をつかんで廊下に出て行った。
俺は引きずられながら
「隠し部屋は何処にあるんだ？」

ヴェイルはポケットから何か取り出し
「魔精霊発見器だ。これで光と闇の場所が分かる。」
ヴェイルは画面を見つめながら
「こっちだ。」
と言った。

幽霊退治（後書き）

ほ～い。は～いそ～い。悪ふざけし過ぎた。
え～と、なんか、話しようやく進みそうだ。
最近日記の出番がないんでナインだけに、前書きに使わせていただこう。
そんなこんなで最近おしるこ缶を一日一本飲み始めました。
毎日の積み重ねが健康に繋がっている。
いや～俺、もしかしたら１００歳まで生きられるかも

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0859s/

ルールブレイカー

2011年10月8日19時39分発行